



薄くても絶縁性能が 確保できる工夫を…

三恵工業

社長 中村 貞之 氏

手袋にフィット感

「電力会社向けの絶縁手袋が中心だが、自動車用を手がけるきっかけは

「ある自動車メーカーから、バッテリー関連の作業で通常の絶縁手袋を使うと3ミリのボルトがつかまめない何か方法はないか、という話があった。最初は電力会社向けのもので試したが、厚くてうまくいかない。そこで手袋の型を小さくしてフィット感をもたせるとともに、薄くても絶縁性能が確保できる工夫をした」

— 具体的には

「ウレタンだけでは絶縁性能が十分ではないので、これを補強する合成ゴムとの2層構造(すべり止めを入れると3層構造)になっている。合成ゴムについてはリケンテクノスと共同開発したもので、特許も複数出願・取得している」

最終ユーザーの把握に努める

— 製品の特徴は

「使用電圧に応じて超薄型と薄型がある。それぞれ厚さは約0・4ミリ、0・6ミリで、一般的な天然ゴム製の手袋より薄くした。また

耐油性ではゴムよりウレタンの方が優れている。さらに、こうした手袋は最終ユーザーを把握できるようにして、評価などを吸収しやすくしている」

— 実際に量産を開始した時期は

「開発を始めたのは7年前で、超薄型、薄型ともに2006年に量産を開始した」

耐久性はデータを蓄積している

— 耐久性や価格面について、どう考えているのか

「耐久性については、現在、データを集めている。ロードサービスの会社などにも供給を開始したが、まだ時間が少ない。もちろん経年変化については当社でも年2回チェックしているが、今のところ問題ない。ただ、新品のままなので実際に工場で使うとどうなるか。作業中にバリなどで手袋を傷つけてしまうケースもある。価格は製品にもよるが、天然ゴム製の方が少し安くなっている」

— 絶縁手袋は定期自主検査が必要となるものもある

「使用電圧が直流で750V、交



流で300Vを上回るものは型式検定に合格する必要がある、6か月ごとに定期自主検査を行わなければならない。当社の製品でいうと薄型は直流750V以下、交流600V以下であり定期自主検査が必要だ。検査は各地の関連する協会をはじめ当社でも対応している」